

平成 30 年 5 月 28 日現在

機関番号：12601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2017

課題番号：25770026

研究課題名(和文) 精神分析の人間学と情動の問題圏 フロイトの『オイディプス王』読解の思想史的一評価

研究課題名(英文) Psychoanalytic anthropology and the problem of affects. A study of Freud's readings of Oedipus the King and their significance in the history of ideas

研究代表者

佐藤 朋子 (Sato, Tomoko)

東京大学・大学院総合文化研究科・学術研究員

研究者番号：70613876

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：社会的文化的存在としての人間に関するフロイトの探究の主な方法論的特徴が、探求者の自由連想と、情動および幻想の集団的次元の問題化にあることを明確にした。また、範例的な位置を占める『オイディプス王』読解が、図式化に向かう傾向とともに悲劇的情動(痛みを帯びた快)への関心を含み、前者が後者によって攪乱されうることを指摘した。この探究方法に備わる多面性と緊張関係が以降、とくに1960年代以降のフランスで、精神分析の言説構造の改変(フェレンツイ、ラプランシュ)や母子関係論の再開発(アブラハムとトロック)、人文学領域での新たな問題提起(アンジュー)、哲学的概念の再検討(デリダ)のうちに現れたことを示した。

研究成果の概要(英文)： We clarify that the principal methodological characteristics of Freud's investigation of man as a social and cultural being lie in the technique, or rather, the attitude of free association practiced by the investigator and problem formulation about affects and fantasies in their collective dimension. We also point out that Freud's readings of Oedipus the King, the prime example selected for this study, show a tendency toward schematization as well as an interest in tragic affects (pleasure marked by pain), and the former can be disrupted by the latter. Our study shows that the heterogeneous directions of the investigation, and the tensions between them, appear in the transformations of the psychoanalytic discourse structure (Ferenczi, Laplanche), the redevelopment of the theory on mother-child relations (Abraham & Torok), the raising of new questions in the humanities field (Anzieu), or the reexamination of philosophical concepts (Derrida).

研究分野：思想史

キーワード：精神分析(応用精神分析) 人間学 フロイト 『オイディプス王』 自由連想 情動(集団的次元における) 幻想(集団的次元における) 現代フランス思想

## 1. 研究開始当初の背景

「精神分析的人間学（あるいは人類学）〔psychoanalytic anthropology〕」という名称は1910年代以来、ローハイムやドゥヴルーなどが代表する人類学の一潮流を指してきたが、1990年代以降、おもにフランスの精神分析家（ラプランシュ、アスーン他）によって別様にも用いられてきた。後者の用法では、社会的文化的存在としての人間をめぐる精神分析的な探究を、神経症治療などにおける「本来の精神分析」といわゆる「応用精神分析」の区別を維持しつつもそれらを横断する可能性において、また、応用精神分析内部でのジャンル区分（文化論、芸術論、社会時評等）を越える可能性において捉えることに主眼が置かれている。ただしこの用法は、フロイトのテキストにみられる傾向を参照するにとどまり、明確な方法論や学問領域としての枠組みを備えていない状況にとどまっていた。

## 2. 研究の目的

本研究では上記の第2の用法に関心を向け、次を目的とした。なお、下記の(1)は、研究開始後3年が経過した時点で研究の進展により明確になった目的である。

(1)「精神分析的」という性格を方法論的平面において一定程度規定し、「精神分析的人間学」の名にふさわしいアプローチを他から区別する基準を示す。

(2)同アプローチにとっての「情動」の問題の重要性を示す。とくに、この問題が、フロイトによる人間学的言説の構築の決定的な契機（研究対象の限定など）において介入することの必然性を示す。

(3)「精神分析的人間学」の方法論的特徴と固有の問題圏を現代思想史の文脈に位置づけ、その意義を評価する。

## 3. 研究の方法

テキスト読解をおもな手段とし、フロイトの著作と、20世紀以降にフランス語で発表された人文学および精神分析のテキストをおもな対象として、次の方針のもと作業を進めた。

(1)精神分析実践に固有の方法的態度としての自由連想の観点から、フロイトのテキスト、ひいては精神分析的なテキスト一般にみられる多様な言葉遣い（生活史や文学作品の要約から心理学的理論まで、あるいは生物学的な言辞まで）とその分節を検討する。

(2)フロイトの『オイディプス王』読解に注目する。フロイトが、父殺しの欲望と母に対する近親相姦的欲望の実現のうちにこのギリシア悲劇の基本的な構成要素を認め、それを図式的に整理したこと、そして、一方で、神経症発症を説明するための理論の命名（「エディプス・コンプレクス」）において、他方で種々の芸術作品や文化、集団心理等の考察においてその図式を応用したことを踏まえ、そうした読解の多岐にわたる展開を可能にしている条件をとくに検討する。

(3)情動の問題が提起される契機に注目する。また、痛み、喪＝悲しみ、不安、寄る辺なさへと情動の問題がさらに分節化されることを考慮し、そのそれぞれを規定している特徴を検討する。

## 4. 研究の成果

本研究が明確化、論証したこと、あるいは定式化した問題を上記の目的に即して述べるならば、次の通りである。

(1)先行研究や関連文献を調査すると明らかになるとおり、ある探究が「精神分析的」であるか否かを判断するという問題は、応用精神分析を自称する探究に関して先鋭的な形で現れてきた。他方で、本来の精神分析と応用精神分析を分かつ境界、あるいは精神分析的でない研究と応用精神分析を分かつ境界もまた問題であり、これについて現在まで

一般的な了解は成立していない。自由連想の成立条件を重視する観点をとるならば、その2つの問題を相関的に、かつ従来の試みよりも一貫した仕方で捉えて整理することができる。すなわち、原理的には、本来の精神分析において分析対象（たとえば患者）の自由連想が必ず生じているのに対して、応用精神分析においては分析対象の自由連想よりも分析家の自由連想のほうがより確実に起きている。また、ライトやコフマン、十川の見解を発展させるなら、応用精神分析については登場人物の分析、作者の分析、読者や聴衆の分析、象徴の同定という4つのカテゴリーを示すことができ、そのどのアプローチについても、自由連想がどの程度役割を果たしているかを基準として、精神分析的という形容に相応しいか否かを問う批判的な検討を提案することができる。

以上から、本来の精神分析を中心とし、応用精神分析において対象や領野の拡大を試みる探究として「精神分析的人間学」を規定することができる。その境界は、自由連想の役割の検討を通じてケースごとに画定、あるいは問題化されるべきものである。

フロイトの『オイディプス王』読解は1897年のフリース宛書簡から最晩年の著作「精神分析概説」にいたるまでのあいだ複数の機会に呈示された。この読解は複合的なアプローチをとり、時期により強調点を換え、全体としては上記の4つのカテゴリー全てにわたっている。そのかぎりでは、方法論的平面においても、フロイトの応用精神分析のなかで範例的な位置を占めている。

(2) 実践から言説の展開へという手続きの観点からすると、精神分析の言説は基本的に3つの平面から構成されるものとして現れる。そのうち、幻想(ないし空想〔die Phantasie〕の語りは自由連想と解釈がもたらし、メタ心理学と呼ばれる心理学理論(狭義には個体の心的装置の理論)は、幻想の語りの内容にみ

られる傾向を析出する作業を通じて構築され、生物学的な命題は、幻想の語りが反復されるところを標しづけるために介入する。1920年に起きた「死の欲動」の導入はメタ心理学の練り直しをもたらし、それにより、以上の3つの平面からなる構造がいっそう明確になった。

情動の問題は、幻想の内容の予期、幻想の語り、そしてその語りの限界の予期(すなわち、極端に強い不快を伴うがゆえに語られない幻想のケース)という契機において提起される。『制止、症状、不安』(1926年)でフロイトが行なった「不安信号」の観点の導入と、トラウマとしての情動の問題の再規定は、以上のように幻想の問題の所在と関連づけることができる。またそのことによって、本来の精神分析に由来する言説と応用精神分析の言説の接続に、幻想および情動の集団的次元という問題が位置することが明らかになる。

応用精神分析のなかでも読者や聴衆の分析(上記のカテゴリー区分参照)は、作品や事態が呼び起こす情動が作業開始のきっかけになっている(すなわち、情動の発生の問題が分析の条件になっている)かぎりでは、精神分析の言説の構造にとってもっとも直接的かつ一貫的な発展をもたらさう。

フロイトの『オイディプス王』読解には、図式化に向かう傾向とともに、痛みを帯びた快という悲劇特有の情動への関心が認められる。後者は前者を攪乱、さらには転覆しうるだけでなく、前者よりも読解にとってより構成的である。イオカステの自死の無視など、フロイトの読解についてバルマリその他が指摘してきた問題点は、別の観点からすれば、『オイディプス王』の精神分析的読解が別の形で展開する可能性を示すものである。

(3) 精神分析的人間学の特徴をなすのは、探究における自由連想と、幻想と情動、とくに集団によるその共有という問題である。精

神分析的人間学に備わる不均質性ないし多面性（上記のとおり、応用精神分析において4つのカテゴリーへと展開されうるもの）それらのあいだの緊張関係、探究方法としての可能性が問題になっている事例は、狭義の精神分析史に留まらず、人文学の諸分野を横断する思想史の文脈にもみいだされる。

フロイトの生前には弟子フェレンツィが陰性転移（否定的な感情の反復）の問題に取り組み、1930年代にはトラウマ的場面の現実性を主張すると同時に、メタ心理学と生物学的な命題の位置関係を逆転させるに至った。その主張は、精神分析的という形容詞を忘れた、たんなる人間学としての自己規定を暗黙のうちに伴っている。

ラブランシュとポンタリスは1964年に「幻想」の概念規定の再考により、クライン派や自我心理学、ラカン派と言説上で一線を画した立場を主張した。ラブランシュはそれ以降（1960年代後半以降 2000年代初頭まで）の仕事で生物学的言辞を排したが、その所作に相関して、メタ心理学と幻想の語りの明確な区別も抹消し、その2つを両極とする言説の空間を精神分析のものとして規定し直した。最晩年の彼による「人間学的基本状況」の理論構築は、応用精神分析的アプローチよりもむしろ、本来の精神分析からの外挿によっている。

デリダのエクリチュール論や差延の思考は、フロイトがトラウマ的反復の極端なケース（トラウマ的場面が現実と思われるケース）で直面した問題に新たな角度からアプローチすることを可能にするものとして評価できる。この評価を通じては、デリダの初期（1960年代）からの仕事と、後年の仕事（たとえば2002-2003年のセミナー）に登場する「幻想」の語およびその用法を有機的に関連づけるための見通しを立てることができる。

『オイディプス王』読解をめぐるアンジュールとヴェルナンの論争（1960年代後半から

1970年まで）には、情動的効果とテキスト読解の条件の関係に関する2つの異なる主張が認められる。アンジュールはまた、読解を通じて身体の問題に遭遇したにもかかわらず、その問題に取り組むことを拒否している。この拒否は、論理的整合性ではなく一つの決断あるいは価値判断に基づくものであり、拒否以外の所作が何をもたらすかはさらに追究されるべきである。

アブラハムは1968年に、フロイトが図式化したとおりのオイディプスの物語は、子どもがつく嘘であると主張した。彼は、恥という情動を問題化することで、またトロック（ないしトローク）との共同作業を通じて、その命題をさらに発展させた。その最大の成果の一つが、1970年代に呈示された新たな母子関係理論（またそれを構成する「双数的統一」、「しがみつき」などの観念）である。

フランスにおける精神分析の発展が社会的象徴的水準でも検討に値する結果をもたらしたことをドルトの例は示している。精神分析的言説の構造からして思想史的研究と文化史的・社会史的研究の連携が課されるのは明らかであるが、ドルトの例は現実にその重要性を示すものである。

以上の研究成果は、以下「5.」に挙げる発表論文で一部公表した。その他の部分も現在執筆中の単著で公開する予定である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

佐藤朋子、フランソワーズ・ドルトとフランス社会の変容、査読有、女性空間、32号、2015、pp.45-54.

佐藤朋子、情動的効果の場—『オイディプス王』をめぐるディディエ・アンジュールとジャン＝ピエール・ヴェルナンの論争（一九六六—一九七〇年）とその争点、査読有、日本フランス語フランス文学会関東支部論集、23

号、2014、pp.215-228 .

佐藤朋子、死の欲動」の導入—『快原理の彼岸』の構成と主要モチーフ、I. R. S. ジャック・ラカン研究、11号、2013、pp.130-152 .

〔学会発表〕(計11件)

Tomoko Sato, L' introduction de la pulsion de mort ou une percée sur la question du corps vivant, 10th Annual Meeting of the International Society of Psychoanalysis and Philosophy、パリ、パリ第3大学、2018 .

佐藤朋子、ジャン・ラプランシュにおける「幻想」の問題—自我心理学、クライン派との差異、教育研修セミナー「フランス精神分析入門—ジャン・ラプランシュの仕事を巡って、日本精神分析学会第63回大会、名古屋、名古屋国際会議場、2017 .

佐藤朋子、他所からの記憶—フロイト以後の『オイディプス王』読解、あるいは応用精神分析の可能性、日本ラカン協会研究会第1回、東京、東京大学、2017 .

佐藤朋子、デリダによる応用精神分析の実践—第5、6、7回講義についてのコメント、Workshop ジャック・デリダ『獣と主権者』を読む、脱構築研究会ワークショップ、東京、東京大学、2016 .

佐藤朋子、成熟の思想—マリア・トローク「女性における"ペニス羨望"の意味」(1964年)のセクシュアリティ論、日仏女性研究学会第10回会員研究発表会、東京、日仏会館、2016 .

佐藤朋子、反復の問題の展開—フロイトからデリダへ、中央大学人文科学研究所「批判的比較文化研究」チーム公開研究会、東京、中央大学、2016 .

佐藤朋子、エディプス・コンプレクスにみる構造と発生の問題—J.ラプランシュ、J.-B. ポンタリス著『幻想の起源』(1964年)とそ

の時代、日本フランス語フランス文学会 2015年度秋季大会、京都、京都大学、2015 .

佐藤朋子、第4-5回解説、Workshop ジャック・デリダ『獣と主権者I』を読む、脱構築研究会ワークショップ、東京、東京大学、2015 .

佐藤朋子、シャーンドル・フェレンツイ、あるいは陰性転移のメタ心理学、日本ラカン協会第14回大会、東京、専修大学、2014 .

佐藤朋子、ニコラ・アブラハムとマリア・トロークのエディプス・コンプレクス理論、日本フランス語フランス文学会 2014年度秋季大会、東広島、広島大学、2014 .

佐藤朋子、情動的効果の場—『オイディプス王』をめぐるディディエ・アンジューとジャン＝ピエール・ヴェルナンの論争(1966-1970年)とその争点、2013年度日本フランス語フランス文学会関東支部大会、東京、首都大学東京、2014 .

〔図書〕(計1件)

川村幸夫、富樫壮央、今村武、佐藤朋子、佐藤憲一、西村醇子、加藤誠之、開文社出版、人間関係から読み解く文学—危難の時の人間関係、2014、93-119頁 .

〔その他〕

〔翻訳〕(計1件)

西山雄二、郷原佳以、亀井大輔、佐藤朋子訳、白水社、ジャック・デリダ講義録—獣と主権者、2014、pp.119-196 .

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

佐藤 朋子 (SATO, Tomoko)

東京大学・大学院総合文化研究科・学術研究員(平成26、27年度は東京大学・大学院総合文化研究科・教務補佐員)

研究者番号: 70613876